
ペナルティ3

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペナルティ3

【Zコード】

Z0243B

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

ペナルティシリーズ第3弾（ついでにペナルティ、ペナルティ2
もご覧ください。）

ペナルティ3・1（第214話～第220話）（前書き）

“『』見るになる方へ”

このページは、ペナルティシリーズ第3弾のページです。内容が分かりにくいことがあると思いますので、ペナルティのほうをまずご覧になられることをお勧めします。

なお、ページにつきましては、作者の作品を『』見るください。

ペナルティ3・1（第214話）～第220話）

“第214話 地球”

地球、それは、46億歳。地球、それは、生命を育むことの出来る唯一の星。

しかし、その地球が、約50年前からおかしくなってきた。人間はそのおかしくなったことを地球破壊といううらしい。

しかし、人間はそれを止められない。やめられない。かっぱえびせん（つてこれ余計。）

さて、地球にある少年がいた。2004年の春のつらら。さあ。あと100メートル

名前はペナルティ。まあ、経歴はこの前を見てね（つて、随分、酷い。それでも人間か。お前。）ペナルティは、悪魔に襲われていた地球をある友人たちと戦った少年だ。（つて、よく分かんねーし。）ところで、なぜペナルティは、なかなか活躍していないんだと思いの方がいるみたいですね。

なぜでしょう。それは、いろいろ理由があつたようです。

そんなペナルティの前に一人のウーマンじゃなくて、マンガ（英語と日本語を混ぜるな。）ペナルティを訪れた。そう。それは、李だつた。しかし、なぜ、李がペナルティのところへ訪れたのだろうか。ペナルティもそう思つた。もしかすると熱斗を助けるなんていうこと？など思い李に聞いた。

「ああ。熱斗は無事だ。悪魔は、もう一度と人間を襲わないことを誓つたそうだ。それよりも、もしかすると、熱斗の存在が消えてしまうかもしれないんだ。」

その言葉にペナルティは耳を疑つた。

「一体、どういうことですか。実際に会つたじやないですか。それに李が答えた。

「ああ。確かにそうだ。しかし、時空には欠点がある。それは、途中で未来が変わると、その未来が瞬時になくなるんだ。その空間が燃え尽きるんだ。」

その言葉はよくわからなかつた。しかし、それがとても重要なことだといふことぐらい時空間のことについて知らないペナルティにだつてわかる。

「どうして、そんなことが起らうとしているのですか。」

それに李はこう言つた。

「それは、環境破壊だ。」

それは、なぜ？

＝第215話 未来のために＝

李は続けた。

「このまま環境破壊が続けば、あと10年も持たない。」

ペナルティは驚いた。あと10年。ちょうど社会人の仲間入りのときには、今までの人間の行った行為によって、地球が、そして、熱斗が滅んでしまうのだ。

そういうえば、もしも、地球が住めなくなつたら、地球を出て、コロニーとかいうものに移り住めばいいと誰かがいっていたのを聞いたことがあつた。しかし、あと10年でそれが完成するとは思えなかつた。

ペナルティは李にどうすればいいのか聞いた。それに李は答えた。

「それは、君自身にある。」

「それは、一体どういうことですか。」

ペナルティは李に尋ねた。

「君は、熱斗やマオと一緒にいたからこそ、地球を助けられたんだ。」

しかし、ペナルティは思った。確かに、マオや熱斗の隣にいたが、自分は、何も役に立てていない。みんな、熱斗やマオがやつづけて

きたからこそ、この場所に今いるのだ。

李は、ペナルティの気持ちを分かつていて。そして、こんな言葉をかけた。

「さあ、旅立て少年よ。」

なんか、時代劇にでも登場しそうなセリフだが、なんとなく、ペナルティは意味が分かつた。

それは、半端な成長ではなく真の成長をペナルティに李は求めたのだ。

しかし、自分がどうすれば地球を助けられるのだろうか。

自分にはなにも力がない。まるで、裸の王様がライオンと戦うのとおんなじだ。

李は言った。

「おまえ自身に力というのはついて来るものだ。安心しなさい。」

しかし、ペナルティはそんなことを言われても、心配だつた。

一体、どうすれば地球を助けることが出来るのだろうか。

そんなことが頭から離れなかつた。しかし、李は、さらに指示した。

「ペナルティは、2006年に行つたよな。そして、その後、実は、悪魔のせいではない、地球の変異があつたんだ。」

そして、ペナルティたちはまた2006年に向かつた。

II 第216話 第一回地球異常抑制会議

2006年夏、日本全国で、低温で、しかも、日照不足で野菜は高騰し、世界では、熱波が歐州を襲つた。さらに、北極では、海面の氷が多く解けた。

しかし、これだけでは、地球の異変は收まらなかつた。日本では、ちょうど日本沈没と日本以外全部沈没が公開され、さらには、アメリカ沈没などという映画があつた。しかし、まさか、本当に起きるとは思つていない。人間というのは所詮、そんなものなのである。しかし、そのことは、ペナルティは知つていて。そして、李さんも。

そのころ、日本である会合が始まった。

「第1回、地球異常抑制委員会を開催する。」

そこにある人が言った。

「これで委員会。」

そのギヤグに会場に木枯しが吹いた。しかもとても冷たい風だった。

その風が吹き終わつた後、司会者がおそるおそる言った。

「それでは、気を取り直して、事案について話させていただきます。

…

男は、そういうと、ある事例を言い始めた。

「ここに熱斗といふ少年がいるとします。ある日、その少年が流しそうめんをやつたとしましよう。みなさんは、水道がなぜ出てくるのか知っていますか。それは、電気を使って、水流に圧力をかけて、そして、みんなの家に届くのです。しかし、電気を作るには、石油が実際に40パーセント以上を占め。さらには、それに変わら方法もいまいちです。それなのに、流しそうめんなんていう贅沢で、さらには地球を破壊するような行為は許しがたき行為です。」

そのころ、熱斗は流しそうめんをやつていた。

“ハクシュン。”

熱斗はくしゃみをした。

「熱斗くん風邪引いたんじや？」

ロックマンが心配していた。しかし、夏なのになぜ。クーラー？

「誰かうわさしているんだよ。」

熱斗が言った。

「しかし、誰がうわさしているんだろう。」

熱斗は少し疑問に思つたが、まさか、過去である会議の話題になつてゐるなんて考えられなかつた。（といつよりも無理矢理と言つたほうが正しいかもしねり。）

そして、司会者は次の例を出した。

「その次に、先ほど、電気は火力しか作れないと申しましたが理由があるのです。まず、風力発電。これの問題点は、鳥が羽に巻き込まれて、あえなくあの世に行ってしまうことです。」

そのとき会場の誰かが、

「ちゃんちゃんちゃんちゃん。ちやちや。（これは、ゲームで失敗したときによく流れる効果音です。）」

また会場がしらけた。

そして、ついに会場の司会者が怒った。

「おまえ、ふざけどんのか。この馬鹿野郎。少しほまじめに聞け、

。」

ついには、何を言っているのかわからなくなるぐらいになっていた。そして、司会者が落ち着いたところで、会長らしき男が立った。まだ、第一回目ということもあり、みんな会長を見たことがなかった。会長はみなに言った。

「自然を大事にしなければなりません。しかし、政府に環境省が出来ても状態は変わらない。なぜでしょう。それは、人間が今の生活を離れたくないからです。だったら、無理矢理でもとめましょう。ストップザ温暖化 & amp; #8252;。」

しかし、だれも、そんなことを目的としていなかつた。ただ聞きに来ただけという人が多かつた。

しかし、会長はそんなことを知つていなかつた。ある作戦を実行することにしていた。

その頃、李とペナルティは、2006年に来た。とはいっても、何をやればいいのか分からない。

ペナルティの出番がまさか、会長との対決とは思つてみなかつた。ペナルティはそのことをまだ知つていない。そして、そんなことよりも、熱斗たちをどうやって助けるかしか考えられなかつた。ペナルティはなかなか思いつかなかつた。しかし、李は何も口を出さなかつた。

その頃、会長は、作戦の準備を確実に進めていた。それは、一体。

“第218話 日本大停電。”

その年の8月にクレーン車が送電線に引っかかり、東京中が大騒ぎになつた。

しかし、会長はそんなことではないことを考えていた。それは、ウイルスを流して、発電所の機能を打ち壊すことだった。

しかし、まだペナルティは知らない。

そして、会長はウイルスを侵入させた。

ウイルスによつて、火力発電所はどんどん停止した。

「やつた。これで環境を救える。」

会長によつて、町はどんどん停電して行つた。

ペナルティたちはたまたま町にいた。

そして、いきなり町の停電に遭遇した。

李は言つた。

「誰かの仕業かもしれない。ともかく電力会社に忍び込もう。」

そして、李とペナルティは電力会社に向かつた。

会長は、至福の時を過ごしていた。自分が行つた行為によつて、世界に貢献できる。こんないいことはないと会長は思った。

そのころ、ペナルティたちは、電力会社にいた。

「これを使って、P E Tをつなぐんだ。」

ペナルティは驚いた。

「大丈夫なんですか。P E Tをつないで。」

李はうなずいた。ともかく、どうにかしなければならなかつた。

ペナルティは、何をしにきたのか分からなくなつていた。

そして、ペナルティのナビが言つた。

それは、やはりウイルスのせいだつた。しかし、ウイルスをつぶすことができない。チップを持っていなかつた。このままほおつておいたら、電力会社も停電になつてしまつ。今は、なんとか補助電力

でまかなかつてゐるが…。

どうすればいいのか、ペナルティは困つてゐた。そのときだつた。

「ロックマンだ。」

ナビは言つた。

ペナルティは周りを見回つた。そこには熱斗がいた。

「なんで、こんなところにいるんだ。」

ペナルティは驚いた。

熱斗はなぜこんな所にいるのだろうか。

熱斗は言つた。

「助けに来たよ。」

『第219話 ウィルスの犯人』

誰がこんなことをしたのだろうか。

そのとき、熱斗たちの前に一人の男が来た。

そして、男は言つた。

「よくも私の作戦を失敗させたな。お前らは、いざれ地獄を見るこ
とになるだろ？』

「誰だ。」

熱斗たちは警戒した。

「俺は、環境の守り神だ。人間に対抗するために、誰も作ったこと
のないウイルスを一瞬にして消してしまつとは、お前たちは凄い、
しかし、お前たちは、もうすぐ死にたたえられるのだ。」

熱斗たちは、男に不気味なものを感じた。

男はさらに話を続けた。

「お前にヒントを与えてやる。古池屋 買わずに飛び込む 水の
音。だ。」

熱斗たちには意味が分からなかつた。しかし、男はもう消えていた。
バニッシュ。

一応、停電は直り、再び、環境について考へることになつたペナル

テイ。そして、そのことを熱斗に教えなければならなかつた。

「そんな馬鹿な。」

熱斗はそう思つた。

大体、なぜ今、ここにこむんだと熱斗は思つた。確かにそうだ。しかし、それは、うまく出来てゐるのである。いろいろなことが…。その夜、ペナルティは考えていた。しかし、いくら考えても、答えは見つからない。

その答えは、意外なところから出てくるものだ。

そして、次の日だつた。

ペナルティは早く目が覚めてしまつた。なぜだろうか、今日はとても大きな事件が起こりそうな予感だつた。しかも後もう少しで…。ペナルティは、外へ出て散歩をした。

そして、公園にたどり着いた。そこには池があつた。しかも、池のほとりには、屋台が立てられていた。しかもその屋台は古池屋。ペナルティは背筋がぞつとした。よく見ると古池屋の横の池のほとりに何かが浮かんでいる。

それは、あの男だつた。ペナルティはびっくりした。しかし、男は動かない。

男は死んでいた。

なぜ、男が死んでいるのだろうか。

ペナルティは急いで李と熱斗を呼んできた。

そして、李は遺体の横の紙を見つけた。そこにはとんでもないことが書かれていた。

＝第220話 キーワード＝

その紙にはこう書かれていた。

“この世は、地獄とかす。平安時代は、末法思想というのが広がつた。その末法思想とおなじようなことが、この世でおきる。人間の手によつて。それを抑えられなければ、地球に明日はない。お前た

ちの健闘を祈る。」

そつ、そこに地球を救う鍵があつたのだ。

この短い文章の中に。

「もうすぐ、地球に危機が訪れる。」

ペナルティはどうやら回答を得たらしい。そのとき、警察が来た。警察はペナルティたちを怪しんでいたが、すぐに疑いが晴れた。そんなんちつぽけなことよりももっと重要なことが今、地球に向かつていた。

それをペナルティたちは知つた。
多分これはあつていると確信した。

そして、次の日、早速地球に異変が起きた。

それは、地震だつた。しかもただの地震ではない。地球全体が揺れたのだ。

すぐに国際機関は、会議を開いた。こんなことが起るはずが無いと。

これは科学者にも分からなかつた。

そのころ、熱斗たちに不思議なことが起きた。

それは、またもやペナルティに起きた。

朝、起きたとき、誰かが声をかけてきたのだ。しかし、どこから聞こえてくるのか分からなかつた。

その声は言つた。

「あなたたちは知つてしましましたね。眞実を。」

「あなたは誰なんですか。」

ペナルティは聞いた。

「それは、答えられません。また、会つことも出来ないでしょう。」

そして、その声の主は言つた。

「あなたたちは、力が備わっています。あとはその力を存分に発揮してください。答えは、今までの行動にあります。」

それを言い終わるとまつたく声は聞こえなくなつた。

「どうした。」

李が言った。

「いいえ、なんでも。」

ペナルティは、そう言った。

一体、何なのであるうか。熱斗たちとの出会いから始まつたことを

ペナルティは思い出した。

そこには必ずマオがいた。そして、そこには七つのじるしがあった。

「そうか。」

ペナルティは頭にひらめいた。それは果たして正しい答えだったの

だろうか。

ペナルティ3・2（第221話）～第230話）

“第221話 哀れな戦い”

その頃、熱斗たちのところにある男が派遣されようとしていた。そして、熱斗たちはその男と戦うこととなるのである。

熱斗たちの前に男が現れた。そして、男は言った。

「哀れなものへ。人間など所詮そんなものだ。」

「なんだと。」

熱斗が言った。

「そこの少年よ。人間の味方をしていると、ろくなことがないぞ。男は例を挙げた。

「人間とは欲の塊だ。それを人間は知っている。しかし、それをやめようとしない。たとえば、人間は、CO₂をたくさん作っている。」

熱斗は言った。

「そんなに人間が欲深いというのか。」

熱斗は少し怒った。男はそれでも冷静にこう言った。

「じゃあ、パン食い競争でも行うか。」

男は手を打った。そして、地面が揺れ始めた。前にレース会場が出て来た。ペナルティは驚いていた。しかし、熱斗は燃えていた。

「パン食い競争のルールなど分かっているよな。」

男は馬鹿にしたような言い方をした。どうやら、熱斗を挑発しようとしているようだ。

「では、もし、私が負けたら、俺は自分でこの毒を飲んでやる。」ついには、男が負けたら毒を飲むとまで宣言し始めた。しかし、まさかこれがわなだとはまだ熱斗たちは気づかなかつた。

そして、男と熱斗は、スタートラインに立つた。

「それでは、ヨーイ、スタート。」

男と熱斗はパンを手指して走った。熱斗は一つ目のパンに喰らいついた。しかし、男は、パンには興味を示さなかつた。

そして、男は立ち止まつて言つた。

「トラップカード償還&#8252;、

男の声によつて、熱斗はつるされてしまつた。そして、男は言つた。

「本当にルールが分かつていなかつたようだな。」

男は薄氣味笑いをした。熱斗は必死で抵抗した。

「そんなことをしたつて無駄だ。お連れとともに牢屋に入れろ。」

そして、熱斗とペナルティは地下にあつた牢屋に閉じ込められた。

「くそ。」

熱斗は地団太踏んだ。

『第222話 巨大食虫植物』

熱斗たちの前に男が現れた。

「よくまあ、あんな罠に引っかかつたな。しかし、安心しろ、ここから出してやる。地獄といふところへな。」

男の顔は怖かつた。薄暗いところで見たからかもしれないが、それでも十分怖かつた。

「おとなしく待つていろ、明日にはここからあの世に出発だ。」

男は、甲高い笑い声とともに消えていった。

熱斗は言つた。

「いつも」めん。俺が足を引っ張つているんだよな。」

「いいや、そんなことないよ。」

ペナルティはこう答えた。

「いや、いいんだ。俺があんなことをしたせいで。」

「相手がわるいんだよ。」

ペナルティが諭す。

「俺は地獄に行かなきゃ行けないんだろうな。」

「そんなことないよ。だつて、今までピンチのときに助けてくれた

じゃんか。」

熱斗は言った。

「俺つて、今思つてみると、みんなの助けがあつたからこそだと思うんだ。一人だけじゃあ、何も出来ない。そんな人間、役に立たないと思つんだ。ましてや、ウイルスを倒すだけじゃあ。」

熱斗はどうやら、悩んでいたらしい。表面には出さなかつたものの、ペナルティは少し、かわいそうだつた。思春期だといつことは自分も分かつてゐる。しかし、何もフォローできない。自分が役に立たないと思つた。

ふたりは自分のことを見つめていた。

そんな夜だった。

次の日。

「起きる。」

冷たい床の上で寝ていた二人を起こしたのはあの男だつた。

「やつと地獄で閻魔大王に会えるんだ。うれしいだろ。」

男は、となりの牢屋の門を開けた。

「お前らは、食虫植物のえさとなるんだ。」

「まさか。」

ペナルティは疑つた。しかし、その食虫植物はただの食虫植物ではなかつた。

「巨大だ。58・5倍はある。」

ペナルティは言つた。しかし、58・5倍といつ細かい数字まで出さなくともいいような気がする。一体、熱斗たちはどうなるのだろうか。

『第223話 倒せamp;#8252;食虫植物』

熱斗たちは危機に瀕していた。

このままでは食虫植物に食べられてしまうかもしれない。

熱斗は思った。もしかすると、クロスフュージョンできるかもしれない

ない。前だつてそうだつた。

そして、いちかばちの大勝負につつて出た。

「ロックマン。」

そして、シンクロチップを入れた。

うまくいくのか。ペナルティは固唾を呑んだ。しかし、その必要はなかつた。

熱斗とロックマンはうまくクロスフュージョンできた。

男は悔しそうだつた。しかし、これが運命といつものなのである。熱斗とロックマンは、どんどんと食虫植物を切つていつた。

そして、ついに熱斗とロックマンは勝つてしまつた。

「やつた。」

ペナルティは熱斗とロックマンに声をかけた。
何とか命を取り留めた3人。

その頃、男はあるところへ向かつた。それは、本部だつた。あの会長の代わりに席を占領していたのは、江藤だつた。江藤は言つた。

「お前、それでも人間か。」

まるで人間のように扱つていなかつた。

「お前、ここから落ちるか。」

江藤はこつ聞いてきた。そこは、ビルの13階。落ちれば、死が待つていた。

江藤の周りの部下がこついつた。

「早く落ちろよ。」

そして、江藤の部下が無理やり男を立たせた。

「じゃあな。はつはは。」

江藤の部下は男を窓から落とした。そして、こんな残酷な言葉を残したのだ。

しかし、江藤の部下は悪気がないようだ。

「くそ、あの光熱斗とか言う奴、俺大嫌い。あんながんばるとかいう言葉につき雨後されている奴が、一番嫌いなんだよ。」

江藤は机を蹴つた。

「そうだな。」

部下たちもそう言った。

「じゃあ、殺すか。」

とんでもない言葉が江藤の口から発せられた。

「よし、行こうぜ。」

部下たちも江藤の作戦に賛成した。それは、もう殺し屋の雰囲気になっていた。

しかし、まだ、熱斗たちは知らなかつた。

『第224話 残酷さ』

江藤は熱斗たちのところへ向かつた。

そして、ついに江藤は熱斗たちを見つけた。

「お前が光熱斗か。」

江藤は偉そうに言つた。

熱斗は少し寒気がした。江藤は続けてこう言つた。

「俺は、お前が凄く大嫌いだ。だから、君は、人間のくずだ。お前は、殺される運命なんだ。」

そして、江藤は部下とともに熱斗に襲い掛かつてきつた。

「やめる。」

熱斗は言つた。しかし、誰もそれは、止められなかつた。

「さつさと死ね。」

とんでもないことを江藤は言つた。熱斗は殴られ、さらには倒され、腹を蹴られている。

「ペナルティ…。」

熱斗は言つた。しかし、ペナルティにはどうしようもなかつた。ペナルティは自分には勝てないと思つた。ただこれを見ているしか自分には出来ない。

そんな自分が悲しく見えた。自分に力があれば、環境破壊を止めるために来たのに、熱斗破壊になつてしまつていい。

なんで神といふものは、とても不公平にしているのだろうか。神はみんなを平等にできないのか。

あるものには、つらい体験をさせて、あるものには、力を与える。こんな不公平なことがあつていいのだろうか。

「神は人間や動物たちを見放したいのだろうか」

とペナルティは思い始めてしまった。

「そうだ、神は、人間や動物たちを見放すために、人間に環境破壊を行わせているんだ。どうせ、神はしまいには、人間たちを殺し合いでに発展させて、完全に地球が元に戻らないようにしてしまおうんだ。そんな運命なら、僕はそれでいい。もう僕の力では何もできない」

そのとき、ペナルティはある光景が目に浮かんだ。

それは、ペナルティにも分からなかつた。しかし、どこかで見覚えがあつた。

夏のある日・・・

ペナルティがとつても小さい頃。

お母さんとあと誰だか分からぬ子供と一緒に歩いていた。

そして、横断歩道を渡ろうとしたとき、悲劇が起きてしまう。

『第225話 消え去られた記憶』

それは、一瞬の出来事だつた。

横から猛スピードで走つてくるダンプカー。

そして、母親は、ペナルティを歩道に突き飛ばした。その瞬間だつた。

母親と小さな子供のまわりは、血の海になつた。ペナルティは怖かつた。ダンプは、過積だつた。その横断歩道は、ちょうど坂のところにあつた。

ペナルティは、それで、今まで忘れていたことをすべて取り戻した。ペナルティはさつきのペナルティではなかつた。完全に思い出したペナルティだつた。

そうだ。僕は約束したんだ、あの時。

お父さんと一緒に。

“絶対、これからは、人を傷つけない。人を殺さない。そして、人を守る。”

それは、人間だけではない。動物もだ。

今は、お父さんが再婚したから、その悲痛なことは頭の奥深くに隠れていた。

しかし、今、それは、泉のように湧き上がってきた。

さつきの自分は、純粋でもなんでもない。ただの曲がったパイプだ。ペナルティは、李さんのことを思い出した。いつの間にか李は消えていた。

李にあつたときのことを思い出した。

李は、僕のことを純粋だと言った。しかし、それは、完全に純粋ではなかつたんだ。それを、磨きなおしてくれた。それは、李さんだけではない。熱斗やマオやハ神たちもだ。

「今、助けるぞ。」

ペナルティは、気合が入つた。もう江藤など怖くなどない。自分の信念を貫けばいいんだ。

ペナルティは、パンチのひとつひとつに気合をいれた。それは、あの七つのしるしのひとつのかつた。しかし、そんなこと、ペナルティは分かつてはいない。

でもそれでよかつた。それは、梅園先生も仲間だからだ。

ペナルティのパンチに江藤は苦しんだ。そして、引き上げていった。

「熱斗。」

ペナルティは、駆け込んだ。

しかし、熱斗は気絶していた。

そこに李が現れた。

李は、ただ立つているだけだった。

「熱斗が…。」

ペナルティの問いかけにも何も答えなかつた。

ペナルティは、聞いた。

「あなたは一体。」

李は答えた。

「よくぞ、そこまで成長しましたね。私は、神の近くにいる存在のものです。」

李は続けた。

「あなたはとても成長した。このものは、次期に元の世界に戻されます。そして、あなたと過ごした記憶は書き消されるのです。時間も元のまま、結局は今までのことは幻界に過ぎなかつたのです。しかし、存在しているものは存在しています。たとえ、人の記憶は消されても、人の存在は確かなのです。人の心も変わっています。これからは、別々の道を歩んでいくことでしょう。」

ペナルティはさらに聞いた。

「じゃあ、この温暖化というのはどうなるんですか。これも幻なのですか。」

李は首を横に振つた。

「では、本当に。」

ペナルティは驚いた。

「この世界は、幻界であるようで、幻界ではないのです。これは、説明が難しいのです。それよりも、私から最終のテスト課題を与えます。それは、あなたの持つている力で地球を救つてください。それが、私の言葉です。私は、あなたがそこまで成長するとは思つていませんでした。それは、うれしいことです。」

そういうと李は消えていった。

ペナルティの前にはとても重要な課題が突き付けられた。しかし、ペナルティはあきらめないと心に誓つた。

また元の世界に戻すのだ。俺なら何でもできる。

そうペナルティは心に誓つたのだった。

神は天から見ていた。

「どうやら、また、一つ仕事を成し遂げたみたいですね。」

李の前にはきれいな女性がいた。まるで、どこかのゲームのようだ。

「はい。また大変でした。」

李は神に報告した。

「私は、前の神から次いで以来、こんなに大変だったものは見たことがありませんでしたわ。」

神は、うれしそうに言った。

「これで、また、まっすぐに生きる人間が増えましたね。」

神は少し疲れているようだつた。李も神よりも疲れている。あとは、ペナルティの結果次第だつた。

II 第227話 環境破壊 II

ペナルティは一人になつた。今までのようには行かない。とても重要なことを一人で行うのだ。自分には力がある。

ただそれを信じるだけでよかつた。

そのころ、地球には危機が迫つていた。

東海地震が発生し、関東と関西方面への連絡手段が寸断された。人々は怖がつた。

九州では、台風16号が上陸し、壊滅的な被害をこうむつた。

その台風は、次の日には四国に上陸し、四国にも多大な影響を与えた。

一方、富士山では、プレートが、富士山のマグマを刺激、富士山が大爆発した。

日本はだんだんと沈み始めようとしていた。海にではない。日本は、人間たちの行為によつて、こうなつてしまつた。しかし、まだ人間たちは分かつていなかつた。

それどころか、これを北朝鮮の仕業だと信じ込んでしまつていた。

町には、疑心があふれていた。

これをペナルティは解決しなければならなかつた。ペナルティは思つた。

この現象を止めるには、あれを使うしかないと。

それは、七つのしるしだつた。

未来のためにもこれしか方法がなかつた。それを李は天から見つめていた。いや、李は怖がつていた。これを七つのしるしで解決しようとすれば、七つのしるしは消滅してしまう。それは、定めだつた。しかし、もうペナルティをとめることはできなかつた。

ペナルティは、心に訴えた。

“ 我の心よ。今の状況から人々を救い出すために封印された力を使う

それと同時に天が光つた。

人々は天を見た。それと同時に心の中から悪が消えていった。

それと同時に、悪魔たちの増殖も止まつていた。

悪魔たちは、再び人間を襲うために、どんどんと集まつていた。しかし、七つのしるしによつて、それは打ち砕かれた。

ペナルティは、凄いことをした。あとは、どうやつて地球を戻すかだけだ。

〃第228話 人間 + 環境〃

人間は環境には今まで、少しだけ興味を示さなかつた。そのつけが、ここに来ているのである。

しかし、中には、そんなの偶然だと思つてゐる人が出でくる。それは当然である。

その一人が、ある集団を作つとした。

その男は、どうせ、町がこんな状態になつたのならば、いつそうの

こと、超巨大な最先端な町にしようと計画し始めた。これを全国でやろうと、仲間を集め始めた。仲間を集めることなど簡単だつた。インターネットを使えば、ひょひょいのひょいだ。そして、インターネットで会議を開いた。

「私たちは、今、何一つ持つていない。しかし、プラス思考で考えれば、国を一揆に最先端にすることも可能なのである。そうすれば、ますます人間の生活が豊かになる。もしかすると、仕事のほとんどが、家でできるようになるかもしれない。そうすれば、災害が来ても、この前のように帰宅困難者を作り出さなくてすむようになる。ぜひ、皆さん之力でこの国を一から作りなおしましょう。」

会長の言葉にみんなが賛同した。

皆、新しい便利な生活にあこがれていた。

オール電化・地下新幹線などなど…。

しかし、まだ誰も気づいていなかつた。それは、それを行うと必ず、人間の身に振り返つてくるということだつた。

しかし、人間たちは、環境のことを考えなかつた。いや、考えていると錯覚していた。

その頃、ペナルティは、その情報をある町で聞いた。そして、ペナルティは思った。

これでは、また、人間が犠牲になる。

ペナルティは焦つた。まだまだ、環境破壊が続いているからだ。いくら、何をやろうと無駄だ。

しかし、ペナルティには気づいていないことがあつた。

環境を大事にするには、その分、人間が、生活の質を落とさなければならぬということに。

ペナルティは男のところへ向かつていた。

＝第229話 人間の欲望＝

そんなころ、男を誰かが訪ねてきた。その人とは、ワイリーだった。
「今、一人の少年がこちらへ向かっていると聞いた。私は、あなたの手伝いをさせていただきたい。」

ワイリーは言った。しかし、どこからそんなデーターを見つけてきたのだろうか。

そんなことよりも、ペナルティに強力な対抗馬が出現したのだ。ワイリーは考えていた。ペナルティを封じるために、熱斗を使うことにした。

しかし、一体、どうやって熱斗を使おうといつのだろうか。
そして、ワイリーはその男と会談を済ますと、時空へ向かった。そして、弱った熱斗を必死で探した。ワイリーにも熱斗がどこにいるか、大体見当がついた。

ついに、熱斗を見つけた。

そして、熱斗たちを護衛していた集団をネットナビたちに倒させた。護衛もまたネットナビだった。

ワイリーは喜んだ。こんなに順調に作戦が進むとは。

しかし、これには、李がただ黙っているだけではなかつた。

李にはどうやら秘策があつたようだ。

そんなことも知らずにワイリーは熱斗にある薬を飲ませた。それは、あの操るための薬だつた。

しばらくすると熱斗は目を覚ました。ワイリーはこう言った。

「さあ、私の言うことを聞くのだ。」

熱斗の目は死んでいた。他の人から見れば、お前はもう死んでいる状態である。

ワイリーは熱斗にペナルティを倒すように指示した。

熱斗は了解してしまつた。いや、熱斗の頭脳は動いていなかつた。しかし、この薬には弱点があつた。ワイリーはまだ分かつていなかつた。なぜなら、未来ではそんな食べ物がなかつたからである。知らずのうちに自分から弱点を作つてしまつたワイリー。しかし、ペナルティはこの弱点を見つけることが出来るのであるうか。

ワイリーはついに作戦を実行に移すときが来た。

ついに、熱斗とペナルティが対決するのだ。亀田興のときよりも凄いことが起こるのだ。（大体、あんなのは、ありなのか。そんなのが通用するならば、世の中は、一体なんだ？）

ペナルティはそのことを知らなかつた。

ペナルティは、ついに男の所へ近づいた。しかし、玄関の前にいるのは、ワイリーと熱斗ではないか。

ペナルティは一瞬、目を疑つた。

まさか。そんな言葉がペナルティの心中を駆け巡つた。

しかし、現実は、ペナルティに隙を与えなかつた。ワイリーは言つた。

「攻撃するのだ。君が持つている力で。」

ペナルティはその言葉にぞつとした。そして、ペナルティは思った。俺はどうすればいいのだ。

ペナルティは、熱斗とロックマンの攻撃を受けそうになつた。しかし、時が止まつた。

「一体、どうしたのだろうか。」

ペナルティは不思議がつた。しかし、自分の上から声が降つてくるのに気がついた。その声はこう言つている。

「私は、あなたたちにもう力を貸すことはできないと思つてしまつた。しかし、今のあなたには、まだ力が必要です。」

「一体、君は。」

ペナルティは尋ねた。

「名を申すほどのものではないです。ただ、あなたたちには、歯が立たない。私たちの力を使わなければ。」

そして、何かがペナルティの体に入ってきた。そして、今度は体の中から声が聞こえた。

「さあ、これで、あなたとあなたのお友達の力は平等になりました。田を覚ませてあげてください。」

その言葉が終わると、急に時が動き始めた。あつ。やられるヒペナルティは思った。

しかし、熱斗の攻撃は止まつた。まるでバリアを張つているようだつた。

「あなたはシンクロチップを持っていますか。」

体の中から誰かが聞いた。それにペナルティは答えた。

「いいえ。この力はあなたのものですか。」

しかし、その声はペナルティのことを無視していた。

「そんなことよりも、まず、あなたが、戦いに勝つことです。」

そして、次にある現象が起きた。

ペナルティ3・3（第231話～第240話）

“第231話 ペナルティ、クロスフュージョン。 ”

ペナルティはクロスフュージョンした。ペナルティはもう頭が真っ白になつた。

その頃、梅園先生はあることを思い出した。それは昔聞いた話だつた。

「面白い話つて知つているかい。」

「えつ。それなに。」

「聞きたいかい。」

「うん。」

幼かつた梅園少年は、その人の話を聞きました。

「え。これから、町に、やつてもらいたい役があるんだけどもいいかい。」

「うん。」

「じゃあ、おじさんが質問したら答えてね。」

そして、おじさんは話し始めた。

「昔、ある村に黒豚がいました。その豚は、町を荒らすことが趣味だつたので、町に大きな被害を『えました。そこで神様はあることをしました。何をしたと思つ?』

純粹だつた梅園少年はこう答えました。

「宇宙に飛ばしちゃつた。」

梅園少年は何を思ったのでしょうか。それは、当時流行つていた、宇宙の星を聞いていたからです。（というか、書いているときに、地上の を聞いているからこうこうことを書くんだ。）

「それじゃ。黒豚が死んでしまつじゃないか。」

なぜか、悲しい雰囲気が漂つた。

「私が、冬の雪の降つていてるとさに元わざわざそれをやりに行つた、

豚なんだ。そんな豚を殺されてたまるか。」

まるで感情移入したように男は言った。

梅園少年は怖かった。しかし、そんなことを気にせずに男はしゃべり続けた。

「そして、神様は、黒豚を動けないように村の前につないでおきました。そうしたら、黒豚のしつぽがだんだん白くなつていいくではないですか。尾も白い。面白い話。（この話は、私の中学の時の数学教師が伝統的に話していた面白い話を改造したものです。ああ。だんだん寒気がしてくる。）」

そんな不思議な梅園少年の話でした。

これで一件落着。（つて、ペナルティはどうなつたんだ？）

『第232話 ペナルティ▽△熱斗』

ペナルティは緊張した。熱斗を倒せば、どんなことになる。しかし、熱斗は攻撃を仕掛けてくるばかりだ。それを守るだけでも精一杯だ。

どうすればいいのだろうか。

しかし、もう攻撃するしかなかつた。初めてだつた。まさか自分がクロスフュージョンするとは思つていなかつた。それに、P E Tなんかでバトルしたことだつてほとんどない。まるでいきなり、闘牛場で戦わされた感じだ。

ともかくチップを使つた。

その頃、天空の城ラピュタ？じゃなくて、神様たち（神様家族じゃないゾ。李モ含まれていた。）は、ペナルティと熱斗の戦いを空の上から見ていた。

「珍しいですね。じきじきに『じらんになられるのは』

李が言った。

「私は、あの一人に興味があります。力はない。しかし、友人に囲まれて、非行には走らない。そんな少年を久しぶりに見ました。」

どうやら神様も興味津々のようだ。

そつとは知らずに、ともかく戦っているペナルティ。そして、操られて、頭脳が停止している？熱斗。

ペナルティは必死に戦つた。しかし、熱斗を折ることはエレベストに登るよりもきついだろう。

自分の中の葛藤。そして、弱さ。

ペナルティは考えた。

なぜこんなところで戦っているんだろう。本当なら、普通に日常を過ごしていいんじゃないか。

なぜ、神は俺と熱斗を戦わせるのだろう。まさか、俺をおもちゃにしているんじゃない。

ペナルティはそんなことを考えてしまっていた。しかし、神様はここが注目だったのだ。

さすがに、神様にも、人間を操ることはできない。それは、人が頭脳を持つていてるからだ。

しかし、人が考えそなことぐらい分かっている。人間にもわかるぐらいなのだから。

神様は、ペナルティの踏ん張りを見たかったのだ。

ペナルティは、それに必死に耐えた。

そして、ついに李は出動した。出動場所とは……。

＝第233話 梅園先生出動（110番）＝

李は未来に来ていた。（ついでに、つづけば未来市じゃないので……。）
そして、ある男に会つていた。

その男とは、梅園先生だった。

李は言った。

「熱斗がワイリーに操られて、ペナルティを攻撃している。」

その言葉に、梅園先生の頭脳は救出のカードを引いていた。
しかも、梅園先生には、ワイリーとの苦い記憶があった。

それは、某地方駅のロータリー。

梅園先生は、友人に会いに一時間近くかけてこの町にきていた。

そして、梅園先生が帰ろうとしたときだつた。一人の女性が、暴力団風のお兄さんに捕まつてゐるではないか。

これは、助けなければならぬ。女の人は悲鳴をあげてゐた。

「やめろ。」

梅園先生は、電車男のようになつてゐた。

「おう、なんだ。お前。」

暴力団風の男が向かつてきた。そのときだつた。

「やめなさい。」

そこに出でたのは、ワイリーだつた。なぜか暴力団風の男は、ワイリーにこう言つたのだ。

「すいません。」

まるで、力関係でもあるかのようだ。

そのときはまだ、世の中で、ワイリーが暴れるようなことはなかつた。

世の中で暴れるようなことがあつたのは、それから、ずっと後のことで。

しかし、梅園先生は未だにワイリーに未練を残してゐる。もしも、俺が女人を助けていたら、今頃、ゴールインして、子供生んでいたのに…。

そんなことだつた。しかし、そういうことが2倍になり、倒そつとする原動力になるのである。

そして、梅園先生と李は、2006年に向かうのである。

熱斗とペナルティは泥沼戦状態だつた。

熱斗の攻撃をペナルティが受けこたえる状態だ。

ワイリーは裏からこの戦いを楽しんでいた。ワイリーは熱斗とペナルティを戦わせて、両方を消耗させようとしていた。

しかし、その後、急展開をすることになることはワイリーには分からなかつた。しかし、それは、確実に実行されようとしていた。

さて、ついに動き出した梅園先生。しかし、この戦いをとめられるのであらうか。梅園先生は、PENTなど持っていない。

どうやって熱斗の暴走をとめればいいのだろうか。それには、ひとつしか道がなかつた。それに梅園先生は気がつくのであらうか。

梅園先生は2006年に来て思い出した。自分が食べたことがあるパンで、こんな商品を。

それは、「頭脳パン」だった。（イトウパン）

梅園先生は思い出した。それは、子供の頃だった。成績が悪い自分に親が少しでも頭がよくなるようにと食べさせてくれた。

ネーミングはなんだか、怪しかつたが、今から考えてみれば、自分が先生になつたのだけ、もしかすると、このパンのおかげかもしない。

熱斗にも食べさせれば・・・。

なんだか、自分が馬鹿らしく見えてきた。そんなの効くはずがない。梅園先生はそんなことを思つた。しかし、まさかそれが効くとは…。ともかく、お店という店を訪ねた。

しかし、今では、取り扱っている店も少なかつた。やつとの思いで見つけたのは、お店で最後のひとつだったものだ。

「熱斗。今待つてろ。」

梅園先生はダッシュで走つた。しかし、店を出て、50メートルのところで転んだ。

「ファイト。一発。」

梅園先生は勇気を振り絞つた。

しかし、そんなことをしている間も、ペナルティと熱斗は戦つているのである。

すぐに梅園先生は起き上がった。そして、再び走った。

梅園先生の心は、空っぽだった。ただ、熱斗とペナルティを助けるために。

そして、ついに、ペナルティのところへ着いた。

「ペナルティ！」

梅園先生の大きな声にペナルティは気がついた。

そして、最後の力を振る絞り、熱斗を四の字固めをした。

「やめろ。」

熱斗は抵抗するものの、生徒にいじめられないよう、リングに上がった梅園先生は、そう簡単にはあきらめなかつた。

「さあ、食べろ。」

「やだ。」

その言葉を無視して、無理矢理、そのパンを食べさせた。

そうすると、熱斗は穏やかになつた。

ワイリーは驚いた。一体何が起きたのだと。

『第235話 永遠と共に・・・』

ワイリーは失敗したと思った。薬の効能が消えてしまった。
結局、ワイリーには、逃げるというカードしか『えられなかつたの
だ。』

ワイリーはそのカードを引いた。

梅園先生は熱斗にこう言った。

「だめじゃんか。」

熱斗は何が起きたのか分からなかつた。

そして、そこに李が現れた。ペナルティは頭を下げた。

「ペナルティ、何で頭を下げていいんだよ。」

ペナルティは梅園先生に説明をし始めた。

「李さんは、実は、GOTEの近くの人間だったんだ。」

その言葉に、梅園先生は氷ついた。

「そうです。もう、いろいろな人に知られてしまいましたね。しかし、私には分かつことがあります。それは、ペナルティは一人では戦えない。仲間がいるからこそ、ペナルティは強いんだということを。」

李の言葉に何か熱くなるものを感じた。感動ではない。そう。今までのことをほめてくれた。そして、自分には仲間が必要だということも。自分でも思っていた。熱斗やマオがいなければ、成り立たなかつた。

自分は、人に助けられているんだということを。

ペナルティは、思い出した。前、人は、助け合っていくものだと、道徳でならなかつた。

それが、今、現れているのである。

李は続けて言つた。

「さあ、あなたたちにうれしいことがあります。私についてきてください。」

そして、李は、熱斗とペナルティ、それに、梅園先生を引きつれて、あるところに向かつた。

広い草原の中を、誰かが休んでいた。

ここはどこだろうと思つた。そして、そこにいる人がこちらを向いた。

「あなたたちが、ついにここまで上り詰めできましたね。」

それは、あの時の女人の人だつた。

「あなたたちの活躍を見守っていました。ぜひ、これからも、この純粹な心と、勇気ある行動を忘れないでください。これからは、機会があつたら、李のほうから、お願ひをしにいくでしょう。あなたたちは、人間界にいなければならぬ存在なのです。」

ペナルティたちは、なんとなく、思つた。

自分たちは、必要とされているんだと。そして、これからも、この仲間と一緒に行動を共にしていくんだと。

熱斗たちは無事に、元の世界に戻れた。しかし、まだ、ペナルティには、環境問題のことが気になっていた。自分には抑えられなかつた問題。それは、地球の誰がやつてもそういうことになるであろう。逆にペナルティは、がんばつたと李は思つていた。

そう。あそこまで踏ん張れるのは凄いことである。

そして、日曜日。熱斗は、昨日と反対の方向のところまで田を覚ました。

「おお。もう、学校に遅れる!」

熱斗は飛び起きた。そして、食パンを手に持ち、急いで家を飛び出る熱斗。

「なぞ起こしてくれなかつたんだロックマン。」

熱斗が声をかけても、起きないロックマン。

勘違いをとめられないまま、秋原中学に到着。そこには、何十人という人がいた。よく見てみると、前に立つているのは、あの健太郎ではないか。

「馬鹿だな、今日は日曜日だ。しかし、制服も着ないで学校に入るとは、間抜けにもほどがあるな。」

健太郎はそう言つた。熱斗は初めて普段着で着てしまつたことを知る。このときほど恥ずかしいことはないだろう。小学校のときは、別に何を着てこようと自由だが、中学からは、決まつてゐるのである。なお、余談だが、公立中学・高校の制服は、旧日本軍の軍服を模したといわれてゐる。さすがのマッカーサーもこのことに気づかなかつたのだろう。

さて、健太郎は続けてこんなことを言つた。

「まいい。どうせ、普段は、『キブリ』のような服を着てゐるのだから・・・・。」

だんだん、怪しくなつてきた。だいたい、なぜ、こんなところに健太郎がいるのかが不思議だつた。

「どうやら、俺たちがいるのが不思議らしいな。」

健太郎は言った。熱斗の思つていたことを簡単に見破られてしまった。

「なぜか、それは、お前を襲うためだ。」

「なぜ、そんなことが分かるんだ。」

熱斗は聞いた。

「それは、お前が今までしたことをあらこさがして、この口を見つけたからだよ。迷子の迷子の子猫ちゃん。」
もうこの言葉で怪しさ十分である。どうやら健太郎が何かたくらんでいるのが目に見えた。

＝第237話 ゲイ・ロワイヤル？＝

前回、怪しさ満点で終わつたペナルティ3。
さて、早速本編に入りましょう。（だいたい、なぜか、ゲイがたくさんひそんでいる某中学校があるからつて、こんな企画立てるなよ。）

熱斗を見て、健太郎は言った。

「お前は、もう逃げられない。お前はもう、やられてこる。」
謎の言葉に熱斗もぽかんとしてしまつた。

「さあ、勝負をしてもらつ。皆の者いいか。」

健太郎が後ろにいる何十人もの人に向かつて言った。

「只今より、二ホンホモ連合の集会を始める。」（桜塚やつくんか！）

そして、熱斗のほうをホモたちが見る（人間扱いしろよ。）

「さて、ここに獲物が一匹います。…」

健太郎の言葉に、熱斗はとてつもないことを想像した。

「釜焼き、（それは、さすがにない）鉄板焼き（それもない。）、トトロ焼き（つて、一体何？）、ピンポン玉をくわえる（なんだ、

そりや。）…”

「この獲物を学校内に放ちますので、それを捕まえてください。捕まえた方はお好きなようにしてください。」

「俺は、物じやない。」

熱斗の発言もむなしく消え去った。

「さて、用意はいいですか。」

健太郎の言葉に、熱斗は焦った。この連中に見つかったら、釜焼きにされる（だから、釜焼きにはされない。）

急いで熱斗は隠れた。

「準備はだいじょうぶでいいですか。」

皆は、「いいとも！」と言った。

そして、一斉にスタート。さあ、熱斗は、磔になるのでしょうか（キリストのようにはならないし、第一、キリスト教の人から御苦情をもらうではないか）

熱斗は、ともかく隠れた。そこは、理科室。骸骨の人形が置かれていた。

さすがにここには近寄つてこないだろうと思つた熱斗。確かに10分くらいたつても誰も来なかつた。

「やつた。」

しかし、これが、裏目に出ることになる。

いきなり、校内放送が流れた。

「ほんにちば。さて、このどこかに、我々の田舎での奴がいるらしい。」

それはまさしくワイリーの声だった。

「隠れていなで出てきなさい。もう、お前は逃げられない。」

ワイリーは健太郎を使つていたのである。

＝第238話 最後に笑うのは誰＝

熱斗はワイリーに見つかってしまった。しかし、健太郎の姿が見当

たらない。多分、追い返したのだけれど。

ワイリーは言った。

「お前の大事な人は、もつそろそろ元の世界に帰らなければならなくなる。」

「一体、どういふことだ。」

熱斗はワイリーの言った言葉に疑問を感じていた。

「つまり、法律によつて、帰されるのだ。」

ワイリーはそう言った。

熱斗は思い出した。あの法律を。まだ、時空法はあるのだ。ただ、いろいろな出来事があつたから忘れていたのだ。

「もしも、お前が、かばつたら、お前は、たとえ子供でも死刑になるのだ。」

ワイリーの不気味な声が聞こえた。

「さて、私の目的はそんなことではない。もしもよければ、手を貸してくれないか。この政府を倒して…。」

「そんなことには手を出さない。」

熱斗は言った。

「たとえ、ペナルティが戻つたとしても、俺の心の中にはずっと残つていて。あの楽しかつたこと、つらかつたこと。それを、法を犯してまでかばつたりしない。」

熱斗は成長していた。こんなこと、前には言えなかつた。しかし、まだ、ペナルティと別れたくないと心は潜んでいた。人生では短くとも、今の熱斗の中では、長くいた。ペナルティがいたから、マオにだつて会えたのかもしれない。まだ、ペナルティとは別れたくない心が生まれるのは当然である。

「そうか。じゃあ、お前とは敵になるんだな。それなら、今倒してしまえ。」

ワイリーがそういうと、いきなり、大きな物体がネット上に出現した。

「さあ、これをとめてみる。」

ワイリーは笑いながら言った。

熱斗はこれを倒さなければならなかつた。熱斗はロックマンをプログラミンした。

しかし、相手は強かつた。

いくら攻撃しても通用しなかつた。

その頃、炎山たちにも出動命令が来ていた。一体、倒せるのだろうか。

＝第239話 ネット世界は？＝

熱斗たちは必死に戦つていた。しかし、相手は倒せなかつた。このままでは、クロスフュージョンが解けてしまつ。

どうしても倒さなければならなかつた。しかし、それはただ焦らせるだけだつた。

このままではどうしようもなかつた。

ただただやられていくだけである。

「今回は、わしの勝ちみたいだな。」

ワイリーは言つた。

「そんなので終わらせてたまるか。」

熱斗はこう言つた。

その時、体に何かが起こつた。それは、力が復活したのだ。（復活

祭だ。牛丼だ。）

「ロックマン。」

熱斗は獣化をすることにした。

急に、攻勢が逆転した。どんどんヒヤッとしていくロックマンと熱斗にやられて、ついに敵が倒せた。

「やつた。」

これで、ワイリーの野望が打ち砕けた。

しかし、打ち破れなかつたことがある。それはペナルティとの別れだつた。

これは、いくらがんばっても無理なことだつた。

熱斗は、自分はどうすればいいのか迷つた。ペナルティはこのこと気に気づいているのだろうか。

その頃、ある敵が近づいていた。

その敵は、今までの敵とは違つた。しかし、まだだれもその存在に気づいていなかつた。

熱斗は疲れて、家に帰つた。明日は、月曜日。宿題があつたものの、そんなものできなかつた。お風呂からでると、すぐさま爆睡した。ロックマンが熱斗を起こそうとするがぜんぜんダメだつた。次の日、それは突然起きた。しかし、皆は気づかなかつた。

次の日、熱斗が起きた。そして、気がついた。

「宿題やるの忘れた！」

ペナルティはきちんと宿題をやつていた。ペナルティは、これが日常茶飯事なので気にしない。

熱斗は焦つた。ましてや、宿題を出したのは、あの怖い数学の先生だからとんでもない。

しかし、まさか、それが帳消しになるようなことが起つたのは、熱斗にとつてはうれしいことだと思つが、それは、うれしいことではなかつた。

＝第240話　虚界？＝

熱斗たちは朝の混乱のあと、すぐに朝食を食べて、学校に向かつた。学校に到着になると、教室には一人の男が立つていた。生徒ではない。

「さて、今まで何とか越えてきたみたいだが、それはただ運が良かつただけだ。それも今日が終わりだな。ある意味、お前たちの付けが回つてきたのだがな。」「一体どういうことだ。」「ペナルティが聞いた。」

「それは、この世界が後もう少しで消滅してしまつところを意味しているのだがな。」

ペナルティは思い出した。李の言つていた言葉。環境破壊をペナルティが止められなかつたときのことを。

李は言つていた。現実のような現実ではないようなといつ言葉を。それが今、ここに現れているのだろう。

「そうだ、お前が思つてることが正しい。私は、神を超えた存在、新しい神だ。」

それが校舎内を響いた。

ペナルティと熱斗は固まつた。

「おれは、神から10年前認められた者だ。しかし、神は俺に他の奴らの尻ふきをさせた。」

新神は強く言つた。

「しかし、人間といつのは、直らない。だから、俺は人間がいやになつた。だから、人間になど未来など『えな』い。」

男は怒つていた。

「それでも、人間は努力している。」

ペナルティは言つた。

「人間は努力していない。あんなの努力といえないと。」

男は言つた。

「そういえば、君はもう過去に戻るんだよな。未来など、君には関係ないよな。」

ペナルティは、気づいた。あの法律があることを。そして、この世界から元の世界に帰らなければならぬことを。

熱斗との別れが近づいている。

ペナルティもようやくそれに気づいた。しかし、この男を止めなければ、ペナルティは帰れなかつた。

「ようやく気がついたようだな。人間は、首をまたもや絞めてしまつた。」

男は哀れそうに言つた。

ペナルティ3・4（第241話）～（第247話）

“第241話 動き始めた政府”

水面下で、国は動いていた。それは、ペナルティの存在を脅かすようなことだった。それは、ある人物が言ったことだった。

「どうやら、科学省は、過去から人を連れてきたらしい。何人かは、その後、帰ったようだが、まだ一人だけ残っているらしい。それをどうにかしなければ、過去が大変なことになる。」

その言葉を聴いた首相はすぐに、貴船長官を呼んだ。

「一体、過去から来た人物がいると聞いたか、それは、本当か。」

貴船長官はこのときが来るのが怖かつた。しかし、今は話さなければならなかつた。

「はい。確かに、一人だけいます。」

そうして、首相は言った。

「なぜ、それを早く言わなかつた。それでは、過去が狂つてしまつ。」

「しかし…」

貴船長官の言葉も聴かずに首相は決めた。その少年を捕まえると。そして、すぐに捕獲隊が結成された。

「さて、長らく滯つっていた。ペナルティ容疑者の逮捕、そして、元の世界に戻すことを行う。」

隊長らしき人物が言つた。それに一人の隊員があるものをさしだした。

「これが、トド凍つっていたものです。」

「馴染落かい。」

隊長は怒つた。

「そんなどでは、ペナルティという少年を捕まえられないぞ。」

「逮捕しちゃうぞ。」

「なにを言つてゐるんだ。お前は、両津勘吉か。」

「はい、佐渡島？ 北朝鮮？」

隊員は駄洒落を連発し、隊長の気分を大いに損ねてしまった。

ともかく、隊長と隊員たちは、ペナルティ狩りに出発した。ついにペナルティに熱斗との別れが来るのである。

そして、隊長たちはペナルティを発見した。ペナルティは、その人たちの目的がなんだか分かっていた。そして、自分は、熱斗を見捨てて、元の世界に戻らなければならないことを。

しかし、自分にはどうしようもなかつた。いや、未来の人はこれを答えとしたのだ。ペナルティの存在のことを。

＝第242話　さよなら＝

ペナルティは、静かに言つた。

「みんなに別れを言いたいので、少し待つてくれませんか。」

隊長は躊躇した。もしかすると逃げるかもしれない。しかし、いくらなんでも突然の別れはきつい。大人ならまだしも、中学生では。「いいぞ。しかし、必ずここに戻つてくるのだぞ。」

隊長はそう言つた。ペナルティはうれしかつた。

そして、早速熱斗の所へ行つた。しかし、熱斗の前までは行けなかつた。お世話になつたけど、別れが来たことを言えなかつた。

その頃、貴船長官は首相に会つていた。そして言つた。

「あの子は、この世の中に必要なのです。」

「しかし、決まりは決まりです。例外を出すわけには行きません。」

首相はそう言つた。

ペナルティはついに戻ることになつた。もうその道を修正できない。隊長に連れられ、科学省についたペナルティ。そこにいたのは、残念ながら交渉が決裂した貴船長官がいた。

「今まで、ありがとう。自分の力が弱かつたから、君を止めることができなかつた。どうか許してくれ。」

「いえ、それがいいのでしょうか。どちらにも。」

そして、ペナルティは、元の世界に帰った。

その頃、親神は、予定通りの結末に喜んだ。

そして、ついに新神は動き始めようとしていた。その夜、熱斗はペナルティがいないことに気づいた。それを察知した祐一郎はこう言った。

「熱斗、ペナルティは残念ながら帰ってしまった。多分もう会えないだろう。前みたいには、理由は分かっているはずだ。」

熱斗は分かった。何もかも。これからは、自分と炎山やライカたちとこの世界を守らなければならないことを。

そして、親神が攻撃してくることも。

親神はついに攻撃することを決めた。攻撃は、あさつてに決めた。

「あさつてが人類の消滅の日だ。」

新神は言った。

『第243話 人類消滅前日』

そして、次の日。熱斗たちは科学省に集められた。もう、新神の侵攻がくることは、政府も分かっていた。そして、それに対抗するために、ネットセーバーを出すことにした。

「今日は皆、忙しい中、集まってくれてありがとうございます。もう知っているとは思うが、新神という人物が襲つてことは確かだ。しかも、最初に狙われるのは、ここだ。そこで、ここに明日の八時に集まつてもらう予定だ。多分、明日が大変な一日となるだろう。」

貴船長官はそう言った。

熱斗たちも危機感を募らせていた。

その頃、新神は着々と準備をしていた。そこにある一人の男が尋ねてきた。それはワイリーだった。

「あなたとどうやら馬があるらしい。」

ワイリーは新神にそう言った。しかし、新神は反論した。

「いや、どうやら、あなたとはあわない。あなたは地球征服だが、私は、人間を殺すために動いている。どうやら、俺と手を組んで、地球を征服しようとしているみたいだが、それはできない。人間は殺されなければならない運命なのだ。」

「いや、どうやら、あなたとはあわない。あなたは地球征服だが、私は、人間を殺すために動いている。どうやら、俺と手を組んで、地球を征服しようとしているみたいだが、それはできない。人間は殺されなければならない運命なのだ。」

「今、着実に作戦のために準備をしている。もうそろそろ準備のほうへ戻つていいか。」

新神はそう言つた。しかし、ワイリーはあきらめられないようだ。「じゃあ、聞くが、今までに地球の環境を破壊することをしたか。それによつて俺の判断は変わる。」

それはワイリーにとつては交渉決裂する道具だつた。しかし、ワイリーは正直に答えた。

「じゃあ、俺は手を組むことはないだろ?」

そして、新神はワイリーを追い出した。

新神は集中して準備に再び取り組んだ。そして、ついに夜、その計画ができるようになつた。

あとは、時がすぎるのをただ見ているだけだつた。

『第244話 決戦』

ついに朝日が顔を再び出した。これが人類最後の朝日となるのであらうか。

熱斗はまだ凄い状況で寝てゐる。ロックマンが熱斗を起こさうとするが、よつほど大きな声でないと起きなさそうである。そして、ロックマンは、熱斗に大声で叫んだ。

「光 熱斗…………」

さすがの大きさに、熱斗も起きた。しかしロックマンもこんな少年がオペレーターとは、大変である。

そして、朝食をとると、すぐさまに科学省に向かつた。

その頃、新神は、ウイルスを科学省に送るために待つてゐた。一見、

弱そうに見えるが、実は、このウイルスは強かつた。今真野とは比べ物にならないほどに。

そして、8時。新神はウイルスをついに科学省に送り込んだ。

「来たぞ。」

科学省では予想通りの展開にほつとした。しかし、まさか、ウイルスを倒すのに時間が蚊かくるとは思いもしなかつた。

熱斗たちは、すぐにプラグインして、ネットナビと戦わせた。しかし、敵は強かつた。

ウイルスは自分で攻撃チップを転送するのだ。もしかするとウイルスではなく、ナビに近いかもしれないが、それでもウイルスなのだ。

ウイルスに熱斗たちは苦戦した。〇（ゼロ）のときよりも。

そして、新神は次のことに行動を移した。

新神は、近くのタワーに上がった。そこにはひとつボタンと、ガスを吸わないためのマスクが用意されていた。

「人間め、おろかな。」

そして、新神は、ガスマスクを装着すると、ボタンに手をふれた。「これで人間は死滅するのだ。」

そう。そのボタンの先から発射されたのは、有毒ガスだった。しかし、他の有毒ガスとは違った。

そのガスは、人間しか死滅しないのだ。

新神は、驚異的な科学力で人間たちに襲い掛かっていたのだ。そんなことは知らずに熱斗たちはウイルスと戦っていた。熱斗はなんだか体が重くなるのを感じ始めていた。

〃第245話 倒せぬまま・・・〃

熱斗たちは、感じていた。自分の体がだんだん重くなり、体が言うことを利かなくなってきたことを。

それと同時に、ウイルスたちの攻撃によって、ロックマンたちもま

た、ヒットポイント（体力みたいなもの）が落ちていった。

しかし、必死に戦つた。でも、だんだん体が利かなくなつていった。

そして、炎山が言った。

「まさか、ここを攻撃するのが目的ではなく、あるガスを大量にまいているのではないか。」

しかし、もう遅かった。新神は、誰にも見つからずに、ガスをまいていた。

それを吸つてしまつた熱斗たちにはもう何もできなかつた。そして、ネットナビたちもまた。

ついに、一人倒れた。

「大丈夫か。」

炎山が声をかけた。その瞬間、炎山も倒れた。その少しの間にも倒れしていく。

最後に熱斗が残つていた。しかし、だいぶガスが大量に体の中に取り込まれていた。

ついに熱斗も倒れた。

「熱斗くん。」

ロックマンが声をかけた瞬間、ウイルスに攻撃を受けてしまつた。そして、ロックマンも倒れた。

ウイルスたちが攻撃しようとしたとき、あるナビが現れた。そのナビを見た瞬間、ウイルスたちはおとなしくなつた。

「所詮、ネットナビと言うのはこれしか強いのはいなかつたか。」

ナビはそう言うと、ウイルスたちと共にどこかに消えていつた。

そして、そのナビは、新神のところに行つた。そして、こう言つた。

「新神さま。おめでとうございます。無事に人間たちは倒れました。

」

その報告を聞いた新神は、さらにボタンを押した。

「そうか。おれは、やつと地球から、人間を排除できたのか。これからは、生態系が元に戻ることだろう。」

そのころ、神はじつとそれを見ていた。神は迷つていた。

人間を殺してしまえば、自然が戻ることは確かだ。しかし、人間の中には、自然を大切にしようとする人間もいた。そこまでしなくてもよかつた。

と神は思った。神は、なぜ、新神が襲つてこないか心配にならないのであるつか。

それには、理由があつた。

新神は、ある日、神の前に来た。そして言つた。

「神様、私は、人間たちを処罰するために入間界に行つてまいります。しかし、ご安心ください。あなたの地位は今までと変わりません。」

その言葉を神は信じていた。そして、そのとき、新神を止められなかつた。よつぽどの理由がない限り、新神を止めることは無理だつたのだ。

＝第246話 2003年＝

ペナルティは元の世界に戻つてきた。
どうやら、親は心配していらっしゃる。警察に相談までしに行つたらしく、ペナルティの再会の時には、号泣していた。
しかし、ペナルティには居心地が悪かつた。今までの友達は消え、新たに中学で一緒になつた奴ばかりしかいない中学校に通つたのだ。精精、小学6年のときの友達が戻つてきただぐらいだつた。
さらに中学の中は荒れていた。授業はぜんぜん進んでおらず、ペナルティは容易についていけた。しかし、周りは、茶髪や、携帯電話などをいじつている奴、さらには、暴力を振つている奴までいた。小学校のときは環境が変わつてしまつた。
クラス内の状態は散々だつた。ペナルティは家に帰ると、すぐに部屋にもぐりこんだ。

そして、自分のP.E.Tを見た。

今は、ナビはいない。しかし、まだ本体はあつた。机の引き出しに

入れっぱなしにしておいた。もしもこんなものがばれたら、とんでもないことになる。だから、机の一番右上の鍵のかかる棚に入れた。それを引っ張りだしてみると、あのときの楽しい時間が思い出された。

熱斗との、そして、マオとの思い出がたくさん思い出された。

そんなある日、それは、風が強い日だった。何隻もの船が沈没するぐらいの大風の日だった。ペナルティは、夜、急に空が見たくなつた。なぜか知らないが…。

そして、夜空を見るためにベランダに出た。空をたくさん星が覆っていた。東京とは思えないぐらいに鮮明に見えた。

普通は、東京で空を見たつて、せいぜい、一等星ぐらいしか見えない。しかし、その日は違つた。4等星ぐらいまで見えた。ペナルティにはそんな経験はなかつた。

そして、その空から、あるひとつ星が消えた。その瞬間をペナルティは見てしまった。

最初はびっくりした。

しかし、それは本当だつたみたいだ。さつきあつた星が消えることにペナルティは違和感を感じた。まさか、偶然に星が消えるはずはないといペナルティは心に言つた。しかし、ペナルティの心の中には、熱斗に何かあつたのではないかという心が芽生えていた。

『第247話 新神のさらなる秘策』

新神は、人間が未来から消えたことに満足感を覚えていた。

しかし、新神は、これだけでは、何も解決はしていないと感じた。

新神は、思つた。

人間が、狩りをしたがためにマンモスが消えた。そして、人間は、魚を取り、肉を食べた。さらには、サルをおちょくつたりしている。そんな人間たちなど、地球上にはいなかつたことにしなければ、その

動物たちに迷惑がかかつてしまつ。

そう考へたのだ。

しかし、まだ、誰も気づいていない。というよりも、新神がいることを知つてゐるのはペナルティぐらいだらう。

しかし、それはまだ早いかもしない。熱斗がいなくなつた世界で神がある会議を新神なしで行つていた。

「まことに残念だが、人間たちは消されてしまった。いや、私が許可してしまつたといつたほうがよいのだろうか・・・」

神は困つていた。しかし、それは閣下もそうだつた。

そして、ついにある者が口火を切つた。

「これは、いざれ大変なことになる予兆ではないのでしょうか。」確かに、誰もそれを思つていた。しかし、今の時点では、新神は何もやつていない。いや、やつているのだが、わざわざ、神の前まで来て、神への攻撃はしないと約束した。

神の閣下はみな、約束は守らなくてはならなかつた。それは、当然のことだつた。

しかし、それを疑問視することは、今までなかつた。

決まりだつたからだ。しかし、今は違つた。それによつて、人間たちを救わなければ、いざれ何らかの形で仕返しがくるのではないか。つまり、神離れである。一時、日本でも起きていたが、今は信じてくれていた。しかし、その神が助けなければ、また神を信じなくなつてしまふ。

それを皆が怖がつた。そして、新神を退治し、元の世界に戻すことが決まつた。そして、実行班の中にペナルティの名前が挙がつたのだつた。

しかし、まだ、ペナルティはぜんぜん知らなかつた。そして、今はただ普通の生活をしていた。まさか、こんな話が来るとは思つてもいなかつた。

しかし、確實にX、ティーは近づいていた・・・。

ペナルティ3・4（第241話～第247話）（後書き）

今までありがとうございました。引き続き、ペナルティ4をどうぞ
お願いします。（ペナルティ4は都合上、第254話までになります
した。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0243b/>

ペナルティ3

2010年10月9日00時10分発行